

中学生の「税についての作文」優秀作品 『十日町税務署長賞』

税金でまわる施設と人々

十日町市立 中条中学校 3年
金 高 咲 希

私たちは日々の買い物で、消費税を納めている。中学生である私には、一番身近な税だ。働いているわけではないから所得税は納めていないし、会社を営んでいるわけでもないから、法人税も納めていない。しかし、私たちが生きていくために必要な日本の公共サービスの多くは、見ず知らずの人が納めた税金で賄われている。

公共サービスの身近なものといえば、まず学校だ。義務教育である小中学校の教科書は税金から購入され、私たちに配布されている。その教科書を使い、様々なことを学習し、将来の日本を支える人材となるのだ。そのほかにも、校舎の整備や備品の購入にも税金があてられている。

次に病院。多くの場合、子供の医療費は税金から補助されている。補助の対象は地域により異なるが、子供を一人中学校まで通わせるのにかかるお金は少ないとは決して言えない額だ。そんな中、医療費の補助は少しでも嬉しいものだと思う。

救急車を呼ぶときにかかるお金も税金で賄われている。海外では、救急車を一度呼ぶのにお金がかかる国が多いようだ。そう考えると、日本の医療サービスは極めて良いものだと感じられる。救急車だけでなく、消防車、警察などの私たちの暮らしを守るサービスにかかる代金も税金で賄われている。だからこそ、私たちは日々、安心・安全に過ごすことができているのだと思う。

最後に今、大きな課題となっているのが年金だ。現在日本では、少子高齢化が進んでいる。約三十年後には「高齢者一人の年金を支えるのは、働き手一人」という未来が待っている。年金を受け取れるのは六十～七十五歳、定年は、六十五歳からとなる。高齢になっても、働ける人、働きたい人は、まだ働くという選択ができる時代だ。若年層の負担が大きくなる中、この制度は高齢者、若年層共に、互いに良いものだと思う。

私が働くようになるのはきっと、七年後くらいだろう。高齢者一人の年金を支えるのが働き手一人になるまでは、まだ時間がありそうだ。しかし、中学生の今より多く税金を納めるようになるはず。

子供が少なくなっていく中でも、高齢者が増えていく中でも、公共サービスを支える見ず知らずの納税者の一人になるのだ。そしてまた、自分たちが納めた税金で配布された教科書で学んだ子供たちが、自分たちが納めた税金で医療費を補助された子供たちが大人になり、また新たな納税者になる。そして自分たちは、年金を補助してもらった高齢者になる。そんなサイクルが税金にはあるのだと思う。

そう思うと、今納める税金が少なくても、今はまだ、税金で賄われている側の人間でも、将来税金を多く納める側の人間になるために学ぶのならば、今は勉強することこそが、社会貢献なのではないかと思う。